
Magical 80's pop street

秋月あきら

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

Magical 80's pop street

【コード】

N6544D

【作者名】

秋月あきら

【あらすじ】

落ちぶれたポップス歌手と、そんな時に出逢った女性との淡い恋のお話。しかし、二人を待ち受けていたのは！

80番通りにある安っぽいレストランカフェ。

客もまばらな昼過ぎに、この店のウエイトレスが、雑誌の取材に答えていた。

「ええ、そのことだったらよく知ってるわよ。でもまさか彼がまた雑誌に載る時がくるなんてね。そう、あそこが彼の特等席よ」
ウエイトレスが指さしたのは、今は誰もない窓際の席だった。

その日も“男”は独りつきりでその席に座り、コーヒー一杯で何時間も粘っていた。

この店に始めたころは、ファンと名乗る人々がその“男”に声を掛けもした。それもいつしか、からかう者ばかりが声を掛けるようになり、やがては誰も声すら掛けなくなってしまった。

誰もがその“男”のことを忘れていた。

時代は流れ、いつたい“男”が何者だったのか、すっかりみんな忘れている。

少し陽が落ちはじめたころ、急な通り雨が地面を激しく叩いた。傘も持たずに店に駆け込んできた若い女性。

濡れてしまった髪や服をハンカチで拭いながら、空いている席を探して店の奥まで歩いてきた。

そこで彼女は“男”と目が合った。

運命の出逢い。

まるで世界から人々が消え、二人つきりになってしまったような感覚。

瞳を丸くした女性はその“男”に声を掛けた。

「わたしあなたのファンなんです！」

“男”は少し煙たそうな顔をして、目を背けてしまった。
人に声を掛けられたのは久しぶりだった。けれど、それは嬉しい

ことではなく、華やかな昔を思い出してしまう嫌なことだった。

“男”も自分で分かっているのだ。もう自分は過去の人間なのだと。

しかし、女性は嫌な態度を取っている“男”に声を掛け続けた。

「レコードも全部持ってます。今でもたまに聴いたりするんですよ、本当に良い曲ばかりですよね」

そう、“男”はポップス歌手だった。

何か心に響くことでもあったのか、“男”は顔を上げて微笑んだ。

「その席座りだよ」

“男”は自らの前の席を女性に勧めた。

「本当にいいんですか、ご一緒して？」

女性は本当に嬉しそうな顔をして、落ち着かない様子で席に着いた。

当時は、誰もが“男”に憧れ、遠い曇りの存在だった。その“男”が今こうして、女性の目の前の席に座ってコーヒーを飲んでいく。

「本当に大ファンなんです。特にメンバーの中ではあなたのことが大好きで、だつてとっても格好良くて、歌声も素敵で……あの、今でもぜんぜん変らないんですね、見た目が。まるで時間が止ってしまったみたい」

“男”はニツコリと微笑んだ。その笑顔は今でも輝いていて、あの頃のままだった。

女性は少し頬を紅くして目線を逸らすと、急に慌てたそぶりを見せながら、手帳を取り出して広げた。

「あの、サイン……もらってもいいですか？」

「いいよ」

“男”は女性からペンを受け取ると、快くサインを書きはじめた。久しぶりに書いたサインだったが、これまで何万回と書いてきたサイン。手が自然と動く。

女性が身を乗り出した。

「ジーナへって書いてもらってもいいですか？」

「キミの名前？」

「はい」

このあとも二人は店の片隅で楽しそうに話した。

夕立が止んだ頃には、すっかり町は夜陰に包まれ、冷え冷えする風も吹いていた。

店を出たジーナと“男”は夜の町を歩き出す。

月明かりが不気味な影を映し、路地に足音が木霊する。

そして、どこからか聞えてくる野犬の遠吠え。

ジーナは“男”に身を寄せた。

静かな夜なのに、ざわざわとする感じは、まるで何かが忍び寄って来るような……。

足早に墓地の横を通り過ぎようとしたとき、前方から人影が近づいてきた。それも1つ2つの影ではなく、たくさんの影がゆっくりと押し寄せてくる。

恐ろしくなったジーナが背後を振り返ると、後ろからも人影が近づいてくる。

助けを求めようとジーナは“男”の顔を覗き込んだ、その時！

「キヤーーーーーッ！」

そこにあつたのは恐ろしい怪物の顔だった。

牙を剥いて襲いかかってくる“男”を突き飛ばしてジーナは逃げようとした。

だが、周りは亡霊だらけ。腐乱した体を引きずりながらゾンビが近づいてくる。

次々と墓場から這い出してくるゾンビ。

ジーナは必至になって逃げ出した。

行方を阻むゾンビを突き飛ばすと、ベットリと得体の知れない粘液が手にこびり付き、ゾンビは手足を崩しながら倒れた。

背後からジワジワと追いかけてくる亡霊たち。

ジーナの背筋が、冷たい汗で凍る。

脇目もふらず逃げ回ったジーナは、明かりも点いていない家に逃げ込んだ。

玄関は鍵も掛っておらず、家の中には人の気配がなかった。代わりにあったのはゾツとするような気配。

窓の割れる音！

すぐに振り向くと、ゾンビが窓から入ってくる。

さらにドアが破壊され、“男”が部屋に入ってきた。

追い詰められたジーナは床に尻餅を付ながら後ずさった。

恐ろしい顔をした“男”が両手を伸ばしながら、ジーナに襲いかかる！

もうダメだと思ったジーナは目を強くつぶった。

そして。

「大丈夫？ 少し飲みすぎたんじゃないの？」

ジーナの肩を叩きながら、掛けられた優しい声。

恐る恐るジーナが目を開けると、部屋の明かりはいつの間にか点けられ、目の前には優しい顔をした“男”の姿。怪物なんてそこにはいなかった。

“男”に手を借りながらジーナは立ち上がり、ほっと胸をなで下ろした。

きつと悪い夢でも見たのだろう。

“男”はジーナの背後から包み込むように抱きしめた。

ジーナも恐怖が解けて気が緩んだのか、そのまま身を任せて瞳を閉じた。

だが、急に寒気が走ったジーナは目を見開いた。

目の前の鏡に映る自分と 背後で牙を剥く怪物の姿！

「キヤーーーーーッ！」

怪物の魔の手を振り切ってジーナは逃げた。

キツチンに駆け込んでナイフを手にするジーナ。

「イヤーーーーーッ！！！」

ナイフを強く握ってジーナは“男”に突進した。

「ギヤアアアアツ!!」

怪物の断末魔が鼓膜を振るさせた。

心臓にナイフを突き立てながら、“男”は床に倒れて痙攣した。そして、やがて“男”は動かなくなった。

血しぶきを顔に浴びたジーナは、放心したまま床にへたり込んでしまった。

何が起ったのかわからない。

だが、これですべて終わったのだ……。

動かなくなった“男”の屍体。

その顔がジーナの気付かないところで、牙を剥いて笑った。

「キヤーーーーッ!」

ウエイトレスは話し終わると、あっけらかんと笑った。

「なんて話なんだけど、安っぽいB級ホラーでしょう?」

「いや、うちの雑誌にはもってこいの話ですよ」

取材はゴシップ紙の都市伝説特集だった。

もう何年も前の話になるが、この辺りで何人もの女性が行方不明になるといふ事件が起きた。それが最近になってまた一人、女性がこの店を最後に行方を消したのだ。

記者は頭を掻きながらウエイトレスにあることを尋ねた。

「それで、その“男”の名前は何ていうんですか?」

「なんだったかしらね」

「バンドの名前でもいいんで思い出してくれませんか?」

「それがぜんぜん思い出せないのよね。たしかその人、ヤク中になつて自殺しちゃったって聞いたけど……」

「そんな歌手いましたっけ?」

結局、その“男”が何者だったのか、誰も思い出すことができなかった。

取材を終えた記者が帰ったあと、ウエイトレスはとある席に向かってニツコリと微笑みかけた。

Magical 80's pop street

そこにはいつもの席でコーヒーを飲む人影が……。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6544d/>

Magical 80's pop street

2009年3月25日13時20分発行